

## 地球システム倫理と麗澤大学における道德科学教育

岩佐信道

キーワード：地球システム倫理、エコシステム、モラロジー、最高道德、道德科学の授業

### 要旨

今日、人類は地球的な規模の極めて深刻な諸問題に直面している。これら地球的問題群とでも呼ぶべき問題に対処するには、一文化、一文明にとどまっているかぎり、その解決は困難で、地球を一つのシステムとしてとらえ、その中で人間の倫理、生き方を探求する必要がある。2006年に、地球システム・倫理学会が発足したのは、このような考えからである。

この地球的問題群の中でも最重要といえる地球環境問題への対応は、とかく対症療法的となり、いわば「モグラたたき」に終わることが懸念される。今必要なのは、人間観の根本的な変革ではなかろうか。

その点で、本学の創立者、廣池千九郎が確立したモラロジーでは、森羅万象はシステムとしてすべて連絡しており、エコシステムの一員である人間は、その宇宙の根本原理としての相互扶助の原理に従うことが必要としている。そして、廣池千九郎は、その実質を、人類の教師と呼ばれる人々の生き方を手がかりに探求し、最高道德の原理として提示した。したがって、最高道德は、地球システム倫理の実質を構成するものとして、今後真剣に研究される必要があるといえよう。

このような地球システム倫理の教育という観点から、麗澤大学における道德科学の授業とそれに関する研究結果の意義について論じた。

### 1. はじめに—地球システム・倫理学会とその基本的な考え方

本学の伊東俊太郎名誉教授は、長年、大学院言語教育研究科で教授を務められ、比較文明文化研究センター長を務めてこられた。また学外における活躍はめざましく、日本の比較文明学会の会長はもちろん、国際比較文明学会の会長ならびに終身名誉会長など、比較文明文化という領域においては世界的に重要な役割を果たしてこられた。その伊東先生を中心に、2006年、地球システム・倫理学会が発足した。伊東先生は、その会長として、その会報創刊の辞で次のように述べておられる。

「われわれはいま、21世紀の初頭に立って、人類と地球の未来を真剣に憂う事態に直面しています。地球温暖化をはじめとする環境問題、生物種の絶滅など生態系の

危機、核兵器や生命操作などの科学技術による文明の歪み、宗教対立によるテロや暴力の発生など、人類史に未だかつてなかったような、見通しのつかない不穏な時代に突入しています。この危機的状況を克服して、これからの人類存立を後世に確保してゆくためには、もはや、1地域、1国家、1文化、1文明にとどまっていたのでは解決できず、まさにそれらの問題を地球的連関において考察し、そのシステムとしての倫理をあらためて構築してゆくほかはないでしょう。このような地球的問題群の解決に向かって、自然・人類・文化・文明の新しい在り方を創り上げるために、その間の調和的「地球システム倫理」を構想し、実践してゆくことは、これからの人類の喫緊の課題であります。」(伊東俊太郎、2006、p. 1、)

ここで注目すべきは、文化、文明を主要な研究対象としてこられた伊東先生が、今日の問題は1文化、1文明の見方にとどまっていたのでは解決できないと言明し、それらを包括する地球システムというもう一つ大きな観点から問題を考える必要を強調されていることである。この地球システムという極めて広い観点から人間の生き方、倫理を考えることは、本学の創立者、廣池千九郎が80年前に体系化した建学の理念としてのモラロジーとも共通するところがあると考えられる(廣池千九郎、1928、1930、1985)。そこで、地球システム・倫理学会の会員としては日の浅い筆者自身の勉強不足を顧みず、廣池千九郎が体系化したモラロジーのねらいは、まさに地球システム・倫理学会がめざしているものと重なるところがあり、モラロジーの中心的内容としての最高道徳は、まさに地球システム倫理として極めて重要なものといえるのではないかということ論じてみたい。その際、本学の「道徳科学」の授業をはじめ、関連する授業で筆者自身が行ってきたささやかな研究にふれて、その趣旨を一層明確にできればと考える。

## 2. 「地球システム倫理」の前提としての人間のとらえ方変革の必要性

上記、創刊の辞にあるように、今日、私たちが直面している地球的問題群の最たるものは、地球温暖化をはじめとする環境問題といえよう。2006年にユネスコから出版された *Making Peace with the Earth* (Bindé, J., ed., 2006) は、先頃、地球システム・倫理学会の会員を中心に『地球との和解』という書名で訳出されたが、そこでも、この点が明示されている。たとえば、その「はじめに」において、当時のユネスコ事務局長、松浦晃一郎は、世界規模における最初の生態学的危機として、

地球温暖化、砂漠化、森林破壊、大気・淡水・海水・土壌の汚染、水不足、生物多様性の危機

をあげている(松浦、2009)。そして、これらの問題に対処するための「持続可能な発展」には、「教育と文化」が決定的な鍵であるとし、「真の責任ある倫理の基礎を築く」ことの必要を強調している。また、デニス・メドウズは、同書第1章で、これらの諸問題は「課題」というより「症状」としてとらえなければならないことを指摘している(メドウズ、2009)。

しかし、*Making Peace with the Earth*などの警告書において、各分野の専門家が声をそろえて地球の危機を訴えているにもかかわらず、世界の多くの人々は、必ずしも、その生き方を真剣に変革しようとはしていないように思われる。環境問題が極めて多様な側面をもち、これに包括的に対処することは極めて困難であることは確かである。たとえば、最近のCOP16における各国の対応を見ても、それぞれ自国の立場を最優先し、地球全体の深刻な問題の根本的な解決のために多少の犠牲を覚悟で協力しようとする姿勢が多く国には

見られなかった。また、私たちの身近な日常生活に目をやれば、電灯やテレビのスイッチをこまめに切る、エアコンの温度を目標以内に設定する、交差点ではアイドリング・ストップを励行するなどは比較的容易に取り組めるが、こうした努力は、全体的視野からながめれば、「気休め」にすぎないといえるかもしれない。たとえば、目を別の面に注ぐとき、こうした努力に逆行する現象がさまざまな分野で起こっている。高速道路料金が引き下げられ、多くの人が、公共輸送機関から自家用車へとシフトし、道路は渋滞によって、いたずらなガソリン消費や、排気ガスを増加させている。また、人々の移動が基本的に車に依存している国では、高速道路が縦横に張り巡らされ、膨大な量のガソリンが浪費されている。かつて自転車大国であった中国は、アメリカを追い越して世界最大の自動車購入国となり、他の国々も、中国に続こうとしているように思われる。

このように、世界の一部で、ある問題に対して真剣な努力が払われ、事態が改善の方向に向かうとしても、他の地域では、別の問題がますます深刻化している。もし、このような状況が今後も続けば、地球は確実に荒廃の一途をたどるのであろう。地球環境の深刻な問題を前に、私たちの努力は、結局「モグラたたき」といわざるをえない状況にあるといえるのではなからうか。

したがって、地球的問題群の根本的解決の為には、それぞれの問題の現象面への対処だけでなく、私たちの基本的人間観の変革が不可欠である。「モグラたたき」の比喩でいえば、頭をもたげたモグラをいくらたたいても、モグラは次々と別の穴から頭をもたげるのである。問題の根本的解決は、地中のモグラを退治することである。それは人間の利己心、もしくは自己中心的傾向を直視し、それをどのように克服していくか考えることではなからうか。

この点、地球システム・倫理学会でも、さまざまなことが提言されているようである。たとえば、地球システム・倫理学会の会報第一号における「もったいない」、「慎みの心」、「稲作漁獵文明」などの提案もそうであろう。しかし、それらは地球上の一部の人々の考え方や生活の仕方であり、それを異なる文化の人々に採用させるにはかなり困難がともなうであろう。また、そのような考え方や生活の仕方を採用することによって、地球環境全体の問題に対応することは果たして可能なのであろうか。*Making Peace with the Earth*の中で、生物多様性の問題を扱ったミシェル・ローロがその論述の最後に到達した結論は、「科学的生態学の知見を組み入れた新しい倫理学が求められている」であった（ミシェル・ローロ、2009、p. 113）。しかし、それでは遅すぎるのではなからうか。松浦元事務局長も「真の責任ある倫理の基礎を築く」ことが必要と強調しているが、それはどのように達成されるのであろうか。

結局、ここでの根本的な問題は、それらの問題に取り組む人間の側の基本的態度、特に基本的人間観が従来のものである、ということにあるのではないかと思われる。つまり、地球上のほとんどすべての人々は、人間は基本的な権利をもっており、他人に迷惑をかけなければ、何をしてもかまわない、という個人主義的人間観に基づいて、経済的豊かさや自己および自己所属の団体の立場を主張し、利益の獲得に向かって突進している。地球社会の一員として、日頃の自分の生き方、自分の行動を根本から反省、検討することはほとんど行われていないように見える。今重要なのは、全ての人々が真剣に受け止めることができるような人間観の変革をどう進めていくか、ということである。

### 3. モラロジーの基本的人間観（地球システムの一員としての人間の在り方）

廣池千九郎は、『道德科学の論文』の第二版自序文の冒頭で、その最も基本的な人間観を次のように示している。

天地剖判して宇宙現出し、森羅万象この間に存在して、いわゆる宇宙の現象を成すに至れるは、偶然にして然ることは出来ないのである。必ずやその原理もしくは法則ありてここに至れるものである。故に宇宙間に産出してこの間に生存するところのわれわれ人間としては、この宇宙自然の法則に従わねばならぬことは明らかであります。この故に聖人はこの宇宙自然の法則を天地の公道とも称せられたのである。・・・しこうして諸聖人躬親らこれを実行して、われわれに御示しくださったのであります。・・・

さて「天地の公道」すなわち「人間としては何人も行わねばならぬところの道」と申すのは、この宇宙の組織されておる原理を指すので、その原理と申すは、万物相互に助け合うこと、すなわち相互扶助の原理によりて、万有が階級的にもしくは平等的に調和し、もってこの宇宙が組織されておることであるのです。・・・(廣池千九郎、1985、p. 1-3)

頁数の関係で、引用はここまでにとどめるが、岩佐は、この冒頭から3頁にわたる文章のポイントを、次の3点にまとめている。

- ① 宇宙の現象の一つである人間は、宇宙の法則に従わなければならない。
- ② その宇宙自然の法則もしくは天地の公道とは、相互扶助の原理によって、この宇宙が組織されていることである。
- ③ 人間がこの天地の公道に従うとは、自我を離れて、この真理を物質的だけでなく、精神的に、人心の開発を目的にして行動することである。(岩佐、2010)

これは、人間が地球システムの一員として行動することは何を意味するかについての廣池千九郎の宣言と考えることができる。ちなみに、3000頁をこえる大著『道德科学の論文』の初版は、1928年に、その第二版は1934年に公にされている。そして、それへの入門書ともいべき『新科学モラロジー及び最高道德の特質』は、その途中の1930年に著されている(廣池、1930)。相互扶助の原理そのものは、入門書としての『特質』では言及されていないものの、『論文』初版の各章で取り上げられている。たとえば、3章では、相互扶助の原理について、当時の諸科学の成果を駆使しながら詳しく論じている。以下は、廣池千九郎によるそれらの文献のまとめである(『道德科学の論文』の新版より)。

この宇宙の内容はこれを科学的に観(み)れば、一つの系統をなして森羅万象みな連絡しておるのであります。とくに地球上の生物は、ただにその形体の連絡せるのみならず、その生活機能もまた互いに連絡しておるのであります。一例をあぐれば、動物の吐きたる炭酸ガスは植物の食物となり、植物の吐きたる酸素は動物の食物となり、また動物および植物の有機的部分の腐敗せるものは相互にその食物となり、また有機物は無機物中に生じてこれに依拠して生活し、無機物は有機物の生存活動によりて変化を起し、また有機物の機能を失うて死する場合には、無機物に還元同化するのであります。(廣池、1985、① p. 106)

最近の科学はかくのごとく宇宙の渾一(こんいつ)たることを事実の上に証明するに至ったのであります。しかのみならず、最近の生理学・生物学および実験心理学の進歩は、動物および人間の精神作用と肉体との連絡を証明し、また人類学的および社会学的研究の極致は、人間各個の精神作用もまた相互に連絡しておって、人間の道徳的精神および道徳的行為は、ことごとくその真相が他人の心に映じて親疎(しんそ)の区別を生じ、

これがために各人の結合もしくは分裂、幸福もしくは不幸の差異を生ずることが明らかになってきたのであります。(廣池、1985、① p.107)

このように、モラロジーは、徹頭徹尾、人間がすべての存在とのつながりの中で生きているという事実、すなわち、相互依存のネットワークの中で、多くの存在に支えられて生きている、という事実を踏まえている。『道徳科学の論文』の随所に示された材料を、岩佐は、麗澤大学の道徳科学の教科書『大学生のための道徳教科書』(麗澤大学出版会、2009)の第1章に「モラロジーの人間観」としてまとめたことがある。これは、この問題に関するモラロジーの関心の広がりを示すものとして重要と思われるので、ここに再録しておこう。

① 森羅万象はみな連絡している

私たちが住んでいる地球は、太陽系に属する一つの惑星です。水が液体の形で存在する唯一の惑星として「水の惑星」とも呼ばれる地球の奇跡ともいえる状況こそは、まさに地上のすべての生命活動の根源をなすものです。そして地球に生命が誕生して以来、その生命活動は今日までえいえいと営まれてきました。私たち人間の生活も、そうした地上の生命現象の一つであることは言うまでもありません。結局、諸科学の成果は、宇宙のすべての存在は、一つのシステムとしてつながり、森羅万象はみな連絡しており、私たち人間は、そうした宇宙の現象の一つであることを明らかにしています。

② すべての生き物の間、生き物と自然の事物との間には、相互依存関係がある

生態学的研究の成果は、地上のすべての生き物(動植物)の間には、相互依存関係があり、また、生き物と自然の事物の間にも相互依存関係があることを明らかにしています。人間も生物の一員として、他の生き物や自然の事物と相互依存関係にあります。たとえば、私たちの呼吸に必要な酸素は、全面的に、植物の炭酸同化作用に依存しています。・・・私たち人間も、生命を維持するためには、幾多の栄養を摂らなければなりません、人間ほど多くの動植物を食べている生き物はありません。人間は大自然の恵みを最も大きく享受している存在といえます。

③ 社会の本質は、人間の精神面における相互依存関係である

心理学的、ならびに社会学的研究の成果によると、人間は、多くの他の動物と異なり、社会の中で生きており、社会生活の恩恵を最も享受しているといえます。そして、社会の本質は、人間の精神面における相互依存関係であることが明らかになっています。今日、人間同士の結びつきはますます拡大し、ますます複雑になっていますが、他方で、その精神的な結びつきの質という点からすると、多くの人間の結びつきは、真の社会を構成しているとはいえないことが指摘されています。いいかえれば、私たちは、多くの場合、ただ自分の必要を満たし、自分の目的を達成するための手段として他と結びついている場合が多いのです。

④ 人間の相互依存の関係は空間的、時間的な広がりをもつ

以上のような人間をとりまく相互依存の関係は、ただ空間的に広がっているだけでなく、時間的な広がりをもっていることが明らかになっています。私たち人間は、結局、一切の現在と未来および過去と結びついているということが出来ます。このことは、私たちが、遠い無限の祖先のいのち、歴史や文化を受け継いでいるとともに、人間ばかりでなく地球上の他の生き物や自然環境に対して責任があり、さらに、後に続く世代に対して価値ある文化や環境を受け渡す責任があるということの意味していま

す。

㊦ 真の人間らしい結びつきとは

このような社会の中で生きる精神的存在としての私たちは、ただ物理的、肉体的に生存するだけでなく、また自己利益のために他者と結びつくだけでなく、全体の調和をめざして、すべての他者に対して愛情、感謝と敬意をもってかかわることが極めて重要になります。(麗澤大学道德科学教育センター、2009、p. 44-46)

モラロジーのこのような人間のとらえ方は、ただ、地球システムの一員という表現よりはるかに包括的、かつ徹底したものである。しかも、精神的存在である人間としては、この相互依存のネットワークの中で生きているという事実をただ物質的に受け止めるだけでなく、自我を離れて、精神的に、人心の開発を目的にして行動することの重要性を強調している。ここには、利己心にとらわれがちな人間の生き方に対する根本的な対応の仕方が明示されているといえる。

#### 4. 地球システム倫理としての最高道德

以上のように、モラロジーは、地球システムの一員としての人間の在り方をふまえた上で、より質の高い道德を明らかにしているのであるが、岩佐は、その間のいきさつを上記のテキストで次のように説明している。

モラロジーは、最近の科学的研究の結論に基づいて、人間の生物学的部分を認めるとともに、他方で、一般の生物よりも優れた人間の精神作用を認めています。その上で、人間の道德教育における必要な基本的なことがらと、私たち現代人が諸聖人の実現した質の高い道德を学び、その実行をめざして努力することに極めて大きな意義があると考えています。(麗澤大学道德科学教育センター、2009、p. 41-42)

そして、諸聖人の実現した質の高い道德を最高道德として提示しているのである。ここでは、その最高道德の主要原理を、地球システム倫理としての観点を明確にするため、廣池千九郎が示した通常の順序とは若干異なる順で、簡単に示してみよう。

① 地球システムにおける万物生成化育の働き (全てに対する公平な慈愛の心) の体現 (慈悲実現の原理)

モラロジーは、地球システム全体 (相互依存のネットワーク) を万物生成化育の働きとして受け止め、その実質を、人類の教師たちが具体的に体現した全ての存在に対する公平な慈愛の心として提示している。したがって、地球システムの一員として、地球上に生きる私たち人間のモラルの第一の原理は、このような慈愛の心の実現である。これには、大自然への感謝と、そこに生きるすべての生き物を大切にすることが含まれる。

② 地球システムの一員として人間の自己中心的傾向の克服 (自我没却の原理)

しかし、現実の人間は、まず自己の保存に急で、自己中心的な心にとらわれており、これを人間の利己心と呼ぶことができる。この利己心が、地球的問題群の発生の根源である。この事実を直視し、自己中心的な心の克服の努力をすることが、慈愛の心実現の基礎である。これこそが、地球システムの一員として人間観の変革であり、地球的問題群への対処の出発点である。

③ 地球システムの一員として人間社会で創造、建設の働きを担っている恩恵者への感謝と報恩 (伝統報恩の原理)

人間社会において、万物生成化育の働きを担い、私たちの生活を支えている存在がある。それは、今日まで私たちの生活を肉体的、社会的、精神的領域で維持、発展させてきた存在であり、その大きな恩恵に気づき、感謝と報恩を心がけることが、地球システムの一員としての重要な生き方である。これによって、地球システムの一員としての人間の生活には、秩序と安定、そして発展がもたらされるのである。なお、ここで「伝統」とは、tradition の意味ではなく、地球システムの万物生成化育の働きを伝える恩恵者の意味で、ortholoninという述語が廣池によって作られている。

- ④ そのような恩恵者にならい、地球システムの一員として、他の役に立つこと（創造、建設の働き）に進んで取り組む（義務先行の原理）

地球システムの一員としての人間は、そのような恩恵者に感謝、報恩の心をもつとともに、自分もまた、そのような存在にならい、他を支え、全体の役に立つことに力を尽くすことよって、万物生成化育の働きに加わっていくことが重要である。どのようなことであれ、他の役に立てることを自分の務めとして進んで引き受け、喜んで実践する心である。このような考えで、地球的問題群の発生の未然の防止と解決のために努力することが地球システムの一員としての人間に求められるのである。

- ⑤ 以上の原理をすべての人と共有すべく、他の人に同じような心を育むことに努める（人心開発・救済の原理）

精神的存在としての人間にとって、ものごとの意味や価値は、心の在り方によって決まる。したがって、地球システムの一員としての私たちは、以上の4カ条の原理に基づいて全てに対する公平な慈愛の心を、自ら涵養していくとともに、その心を他の人々に伝え、すべての人がこの心を共有できるようにすることが最も重要である。このような努力をとおして、地球的問題群は解決の方向に向かい、即物的な地球システムではなく、すべての生き物が人間とともに大切にされる真に生き甲斐のある地球コミュニティに近づいていくのである。

## 5. エコシステムの一員としての根本的な人間観変革に向けて — 麗澤大学における道徳科学教育との関連で

以上、廣池千九郎が確立したモラロジーは、諸科学の結論を踏まえて、エコシステムの一員としての人間の在り方を明らかにし、さらに、そこで提示された最高道徳は、まさに地球システム倫理そのものといえる、ということを論じてきた。では、このことは、本論文の初めの方でふれた、地球的問題群、その中核としての環境問題、それへの根本的対策としての「人間観の変革」、という一連の問題とどのように関わるのであろうか。この点で重要なのは、松浦晃一郎ユネスコ事務局長が強調したように「教育」である。*Making Peace with the Earth*を初めとして、専門家は、地球の深刻な状況に対して、さまざまな警告を発しているが、それらがただ、知識として受け止められるだけでは十分ではないのであって、一人ひとりが、その知識を自分の生き方に転換し、知識が「真の責任ある倫理の基礎」とならなければならないのである。その際、最も基本的なのは、私たちが、人間はエコシステムの一員として生きているということ、あるいは相互依存のネットワークの中で多くの存在に支えられて生きているという事実そのものを徹底的に理解することではないかと考える。

たとえば、地球環境にかかわる深刻な問題として、熱帯雨林の減少、砂漠化の急速な拡大、北極の氷の減少などの具体的な事実に接したとしても、多くの人々は、それを、よその地域の出来事で、自分たちとは直接関係ないことと受け止めたり、自分に直接できるこ

とはない、と考えてしまいがちである。そのような情報を、私たちの日々の行動に結びつけるためには、私たち自らが、森羅万象が密接につながりあった相互依存のネットワークの中で生きているという事実についての徹底的な理解以外にはないのである。これをもう少し分かりやすくいえば、たとえば、地球環境に関するさまざまな問題を、ただ地球のさまざまな地域で生じるさまざまな症状ととらえるか、それとも、それらをシステムとしての地球が呈している全体的な症状の現れととらえるかによって対策とその効果は大きく異なるであろう。さらに、人間自身の立場を、ただ諸問題に対処しなければならない存在として受け止めるか、それとも、すべてがつながりあったシステムの最も重要な一員として、人間の自己変革によって、問題は根本的に違った様相を呈するととらえるかによって、結果は大きく異なるはずである。この点については、別に詳しく議論する必要があるので、ここでは、岩佐が麗澤大学の授業で取り組んできた2つの研究を取り上げてみたい。

### (1) 食物連鎖の受け止め方に関する研究 — 知的理解と道徳的コミットメント

#### 【目的】

私たちが、人間観の根本的な変革を経て、環境問題をはじめ地球的問題群の解決に向けて努力していくための基本は、自分たちがエコシステムの一員であるという事実を徹底的に理解することと考えられる。しかし、その受け止め方は、人によって大きく異なる。そこで、自然界における食物連鎖の事実を扱ったビデオを大学生に見せ、彼らがそれをどのように受け止めるかを明らかにすることによって、地球システム倫理に関する教育ならびに地球システム倫理の実践の仕方について示唆をえることが目的である（岩佐、2004）。

#### 【方法と被験者】

教職科目履修の大学生に、イワナの仲間の淡水魚、オシヨロコマの生態を扱ったビデオを見せる。これはかつてNHKで放映された「生き物地球紀行」の『森が育む魚、オシヨロコマ』からのもので、次の頁にその映像の一部が示されている。このビデオは次のようなことを明らかにしている。

- ① オシヨロコマは水生昆虫をエサにしており、その意味で水生昆虫に支えられている。
- ② 水生昆虫は、川に落ちた木の葉を食べており、魚は間接的に、森に支えられている。
- ③ その魚、オシヨロコマも、森に棲む鳥、ヤマセミの餌食となる。
- ④ 結局、これら森の生きものたちが、大きないのちのつながりの中で生きている。

ビデオ視聴の後、学生たちは、質問紙を渡され、感想等を記入する。ここで重要なのは、学生たちは、同じ質問紙を渡されたと思っても、実は、質問1は、次のように、学生によって内容が異なることである。つまり、この最初の質問の違いによって、一定数の学生は実験群となり、残りの学生は統制群となる。

#### 質問1

実験群に「あなたはこの魚に比して人間が食べているものの種類や量の多さについてどう思いますか。また、人間はそうしたもの（食べているもの）に支えられていると考えますか。」

統制群に「あなたはオシヨロコマという魚の名前を聞いたことがありますか。川で遊んだことがありますか。出てきた水生昆虫の名前をできるだけ多くあげてください」

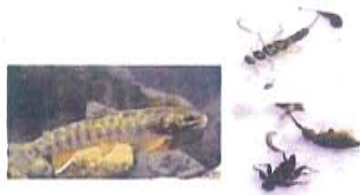
#### 質問2

両群に「このビデオを中学生に見せるとすれば、学校のどのような時間に見せるのがよいと思いますか」



『森に育まれる魚、オショロコマ』

① オショロコマのエサは水棲昆虫



② オショロコマは、多いとき、1日に3000匹の虫を食べている



③ 虫たちのエサは、川に落ちた木の葉  
— オショロコマは森に支えられている



川に沈んだ木の葉には無数の昆虫が



④ そのオショロコマもヤマセミに食べられる  
見事なダイビングキャッチ



— 森の生きものたちのいのちのつながり —



【結果】

表1で明らかなように、統制群の多くの学生が「理科の時間に見せるのがよい」と考えたのに対して、質問1で、この食物連鎖の事実を私たち人間に引きつけて考える機会をも

った実験群の学生の多くは、理科の時間ばかりでなく、「道徳の時間」で見せるのがよいと考えた。同じ事実の意味合いや受け止め方が、人々の経験や価値観によって大きく異なることがわかる。

表1. 質問2：このビデオは、中学校のどの時間に見せるのがよいと思いますか。

見せる時間	実験群	統制群
道徳の時間	15	4
理科	16	14
総合学習	2	2
保健	2	1
社会科	3	1
生活の時間	0	1
学級活動	1	1
家庭科	3	0
ホームルーム	1	0
国語	1	0
課外活動	1	0
総数	45	24
人数	28	18

【考察】

地球システム倫理の観点からすると、この結果は極めて重要なことを示唆している。すなわち、この統制群の学生の反応は、エコシステムに関する諸事実に対する私たちの通常の受け止め方を示しているのかもしれない。つまり、全ての事象が、地球システムの一環としてつながっており、人間もそうしたシステムの一員として生きているにも関わらず、私たちは、とかく、それらの事象を自分の生き方とは関係のない客観的なことがらとして受け止めているのではなからうか。また、地球環境の問題も、せいぜい、対応を迫られている問題群として専門家に任せておけばよい、と受け止めているのではないか、ということである。統制群の多くの学生が、森における食物連鎖の事実を、ただ興味深い事象に関する知識として、理科、もしくは生物の時間に取り上げることがよい、としたのは、そのような受け止め方の反映と考えられる。

これに対して、質問1で、食物連鎖の事実を、人間に引きつけて考える機会をもった実験群の多くの学生は、このビデオが明らかにした事実を、ただ自然界の興味深い事実としてではなく、人間もまた、このビデオに示された生きものたちと同様に、エコシステムの中の一員であることを認識し、この映像は、そうした自分たちの生き方、モラルを考える格好の材料であると受け止めたことが示唆される。

考えてみれば、私たちの多くは、専門家たちがしきりに警告を発している地球環境の危機を、ただ対処し、解決を必要とする問題と受け止め、あれやこれやの対策を検討し、人々に実行させようとしているだけかもしれないのである。もし、そうだとすれば、それは、地球環境問題対策ではあっても、地球システム倫理とはいえないであろう。また、たとえ倫理と名がついている場合でも、多くは、〇〇倫理、△△倫理、××倫理と、個別的な倫

理であることが多い。しかし、ここで求められているのは、地球システムの一員としての人間のトータルなモラル、すなわち、個別的な倫理の基盤となるモラル、地球上のすべての存在とのつながり方、かかわり方を規定するモラルなのである。

廣池千九郎は、「一念一行仁恕を本となす」ということを言った。これは、「何を考えていても、また何を行っていても、常に慈悲、思いやりの心をもって」ということの大切さを述べたものである。これを環境問題の観点から受け止めれば、「一念一行エコシステムの一員としての自覚をもって」といえるかもしれない。今こそ、地球システムの一員としてのモラル・コミットメントが、それも最高道徳的コミットメントが求められているのである。

## (2) 利己心の受け止め方とその克服に関する研究

### 【目的】

今日の地球的問題群への対処においては、「人間観」の変革が極めて重要であることは、2 で論じたところであるが、この問題に深いかかわりをもつのが、人間の利己心や自己中心的傾向の受け止め方の問題である。すなわち、現代社会に生きる私たちは、いじめ、家庭崩壊、政・官・財界における不正、地球温暖化など、さまざまな問題に直面している。特に地球環境の問題は、着実に深刻の度を深めているが、そこには、私たちが、自分の快適な生活を追い求めることに急で、その結果が全体として、地球に、そして将来の世代に、どのような影響をもたらすかを考慮することができない人間の弱さが露呈されている。

発達心理学でいわれる自己中心性とは、子どもがものを見る場合、その対象の見え方は、見る人の場所や立場によってまちまちであるにもかかわらず、今自分が見ているものがすべてであると思ひこむ子どもの思考の傾向のことである (Flavel, J.H., 1963)。しかし、現実の社会生活においては、子どもだけでなく、すべての人間が、多かれ少なかれ、広い意味での自己中心的傾向にとらわれているように思われる。

もし、現代社会のさまざまな問題の根底に人間の自己中心的傾向が深く関わっているとすれば、それをみつめ、それを克服するための努力は、さまざまな問題の解決のための極めて重要な出発点といえるのではなかろうか。そのような問題意識から、大学生が人間の自己中心的傾向についてどのような考え方をもっているかをさぐることが目的である。(岩佐、1992、2007)

### 【方法】

麗澤大学を含む3つの大学の5クラスの学生に、上記のような問題の趣旨を説明した文書を配ったうえで、次の ①、② の質問をした。他方、麗澤大学の岩佐が担当する道徳科学の授業では、人間は相互依存のネットワークの中で生きていることを集中的に取り上げており、そのような授業を経験した学生が、人間の自己中心的傾向をどのように考えるかを調べるために ③ の質問を行った。

<3つ大学の5クラスの学生対象の質問>

質問 ① 現代社会のさまざまな問題の根底に人間の利己心もしくは自己中心的傾向が関わっていると思いますか。

質問 ② 人間の利己心もしくは自己中心的傾向を和らげ、徐々に克服していくことは可能と思いますか。

<岩佐が担当する道徳科学のクラスの学生への質問>

質問 ③ つながりや恩恵を感じることは、人間の利己心もしくは自己中心的傾向を和

らげることにつながると思いますか。

【結果】各グループの学生のそれぞれの質問に対する反応は、表2、3、4に示されている。

表2. 質問1: 現代社会のさまざまな問題の根底に人間の利己心もしくは自己中心的傾向が関わっていると思いますか

質問.1 \ クラス	A	B	C	D	E	全体
そう思う	74	39	32	42	10	197 (79%)
そう思わない	6	0	0	0	3	9 (4%)
どちらともいえない	14	3	5	4	3	29 (12%)
わからない	2	3	6	2	0	13 (5%)
人数	96	45	43	48	16	248(100%)

表3. 質問2: 人間の利己心もしくは自己中心的傾向を和らげ、徐々に克服していくことは可能だと思いますか

質問.2 \ クラス	A	B	C	D	E	全体
可能と思う	26	24	18	22	3	93 (37%)
可能と思わない	22	15	3	6	6	62 (21%)
どちらともいえない	37	3	18	16	7	81 (33%)
わからない	9	3	4	4	0	20 (8%)
無回答	2	0	0	0	0	2 (1%)
人数	96	45	43	48	16	248(100%)

表4. 質問3: つながりや恩恵を感じることは、人間の利己心もしくは自己中心的傾向を和らげることにつながると思いますか

そう思う	46 (90%)
そう思わない	3 (6%)
どちらともいえない	1 (2%)
わからない	1 (2%)
人数	51(100%)

表2の結果を見ると、現代社会のさまざまな問題の根底に、広い意味での人間の自己中心的傾向が横たわっているとの考えは、かなり多くの学生に受け入れられていることがわかる。しかし、表3で明らかのように、「人間の自己中心的傾向を和らげ、徐々に克服していくことは可能である」と考える学生は、ほぼ半数か、それ以下である。

これに対して、表4の結果によれば、道徳科学の授業において、私たちは相互依存のネットワークの中で、多くの存在に支えられ、大きな恩恵を受けていることを取り上げ、そ

の上で、現代社会の多くの問題について考える機会をもった学生の場合、90%の学生が「つながりや恩恵を感じることは、自己中心的傾向を和らげることにつながる」と答えた。これは、こうした特別の授業を受けることのなかった一般の学生とは著しく異なる結果である。

#### 【考察】

現代社会では、さまざまな問題が生じている。そして、それらの多くが、人間の自己中心的傾向に根ざしたものであるとの考えは、多くの学生に受け入れられている。しかし、一般の学生たちは、それがしつけや教育によって容易に克服できるものとは考えていないようである。彼らは、人間が、欲望や煩惱に負けてしまう弱さをもっており、それはどうしようもないものと受け止めているのかもしれない。

しかし、私たち人間の生き方を、相互依存のネットワークの中で、多くの存在に支えられて生きているという観点からとらえる授業を経験した学生の場合、ほとんどの学生が自己中心的傾向を和らげていくことは可能であると考えていた。この結果は重要である。どうしようもないほど根強い人間の自己中心的傾向も、私たちが、つながりの中で多くの存在に支えられて生きていることを深く理解し、認識することによって、解きほぐされていくかもしれないという学生たちの認識は、人間観変革へ向けての私たちの教育や、地球的問題群に対する努力の方向性について、重要なことを示唆しているように思われる。

私たちは、本論文の2において、地球的問題群に対処する私たちの努力は「モグラたたき」に終わりがちであることを指摘したのであったが、諸問題への根本的な対応としての「人間観の変革」を進めるうえでも、まず、私たちが相互依存のネットワークの中で、多くの存在に支えられて生きているという事実を徹底的に直視し、それを真剣に受け止めることが重要であることが示されたといえよう。また、地球システム倫理の教育という点でも、同じことがいえるであろう。すなわち、広い意味での道徳教育においても、特定の徳目や倫理規範を強調するよりも、私たちが、地球システムの一員であること、すなわち、すべての存在と密接なつながりの中で生きていることの徹底的な自覚こそは、私たちに、地球的問題群の個々の実情に目を注ぐだけでなく、その根底にある私たちのさまざまな人々や集団、世界や地球環境などのかかわりを見つめ直し、そのつながりを豊かにしていこうとする意欲につながることを期待されるのである。

## 6. おわりに

地球的問題群に対処するためには、地球をシステムとしてとらえ、その倫理を探究していかねばならないと考える地球システム・倫理学会の発足とその活動という文脈の中で、廣池千九郎がモラロジーによって明らかにした最高道徳は、まさに地球システム倫理としてとらえることが可能であり、またそれが極めて重要ではないか、ということ論じてきた。地球環境の危機への取り組みという観点に即して、その要点をもう一度確認すれば、次のような点をあげることができる。

- イ、 今日、地球に生じているさまざまな問題は、個別的な文化や文明の問題としてではなく、地球的問題群としてとらえる必要がある。
- ロ、 中でも地球環境の問題は、最も広範囲にわたるもので、かつ最も深刻である。
- ハ、 しかし、「もぐらたたき」的対症療法では、問題はますます深刻化していくだけである。

- ニ、 状況の根本的解決のためには、私たちの人間観の根本的転換（人間の利己心を見つめ、これを根本的に克服すること）が必要である。
- ホ、 そのためには、私たちがエコシステムの一員として生きていることを、最も深いレベルで受け止めることが必要である。
- へ、 それは、対症療法的なモラルではなく、廣池千九郎が試みたように、地球システム倫理の実質を、人類の教師たちの実現したような質の高いモラルとして受け止め、それを実行することといえるのではなからうか。

廣池千九郎がモラロジーによって明示した最高道徳を、まさに地球システム倫理の中核として展開していくうえで、紹介した2つのささやかな研究は、重要なことがらを示唆しているように思われる。

### 参考文献

- 廣池千九郎（1985）『新版 道徳科学の論文』モラロジー研究所、（初版、1928）
- 廣池千九郎（1930）『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』モラロジー研究所
- 伊東俊太郎（2006）「創刊の辞」『地球システム・倫理学会会報第1号』地球システム・倫理学会
- 岩佐信道（1992）「エゴイズムとエゴセントリズム—自我没却に関する一考察」、『モラロジー研究NO. 37号』、モラロジー研究所
- 岩佐信道（2004）「道徳教育に関する一考察—相互依存関係の受け止め方に焦点を当てて—」『モラロジー研究NO. 54号』、モラロジー研究所
- 岩佐信道（2007）「自己中心的傾向の克服についての一考察」第49回総会論文集、日本教育心理学会
- 岩佐信道（2010）「相互依存のネットワークの中で生きる人間のモラルとしての最高道徳」『廣池千九郎の思想と業績—モラロジーへの世界の評価』モラロジー研究所
- 松浦晃一郎（2009）「はじめに 地球との和解」『地球との和解—人類と地球にはどんな未来があるのか』ジェローム・バンディ編、服部英二・立木教夫監訳、麗澤大学出版会（原文は2006）
- デニス・メドウズ（2009）「どのようにして、またいつ、私たちは成長の限界を経験するのでしょうか」『地球との和解—人類と地球にはどんな未来があるのか』ジェローム・バンディ編、服部英二・立木教夫監訳、麗澤大学出版会、（原文は2006）
- 麗澤大学道徳科学教育センター（2009）、『大学生のための道徳教科書』、麗澤大学出版会
- ミシェル・ロロー（2009）、「私たちはなぜ生物多様性のことを心配しなければならないのか—生態学と倫理学の出合い」『地球との和解—人類と地球にはどんな未来があるのか』ジェローム・バンディ編、服部英二・立木教夫監訳、麗澤大学出版会、（原文は2006）
- Bindé, J., (2006) (Ed.) *Making Peace with the Earth : What Future for the Human Species and the Planet?* UNESCO
- Flavel, J.H., (1963), *The Developmental Psychology of Jean Piaget*, Van Nostrand